III 鳥　類

1. 概　要

今回の調査は，昭和52年7月及び昭和53年8月から12月までの短い期間であったため，鳥相の全容をつかむことは不可能であった。特に調査時期に欠かすことのできない繁殖期を逃がしたことになるが，既往の調査記録により補足して報告することにした。

全調査区間で確認できた種類数は69種であったが，調査以前に確認されている30種を加えて99種について記述する。

置賜盆地を流れる最上川上流部の河床は，ほとんど砂礫質で泥土質の流域はほとんど見られないため，水鳥類の生息環境としては単純であるといえる。

シギ・チドリ類・バン・ヒクイナなどは，村山地区に比べてすくない。しかし，支流の合流点や旧河道の水溜りなどの湿地帯には繁殖地が見られ，各所にはガン・カモ，シギ・チドリ類の渡来地，休息地に適した地点が見られた。

近年，水質保全対策のためか魚影が濃くなるに従って，これを食餌としているササゴイ・ゴイサギ・コサギ・ヤマセミ・カワセミなどが増加，または回復のきざしが見えはじめたようである。

今回の調査域より下流の上郷ダム，大江町左沢などで繁殖が知られているヤマセミは，荒砥付近や米沢付近でも観察することができた。

コサギは県内の繁殖はまだ確認されておらず，以前より少ない種類であったが近年になって夏季より冬季にかけて各地で見られるようになった種願である。米沢市その他の流域でも見られたが，長井市を中心に荒砥までの間で15羽前後の個体が長い期間生息しているのが見られた。

ササゴイも県内ではあまり多い種類ではなかったが，調査区域全域にわたって生息しており，最近増加しているものと思われる。

ゴイサギは県下全域で広く見られる普通種であるが，荒砥地区の山地に繁殖コロニーがあり，同地区が恵まれた生息環境のあらわれであると思われる。

本県には見るべき草原，原野地帯はないが，最上川の整備された堤防と河川敷内の草地・ススキ・ヨシ群落は，草原の鳥には絶好の環境となっており，ホオアカ・セツカ・ヒバリ・コヨシキリ等が見られる。特にホオアカは全域に亘って生息している。

湿地帯のヨシ原には必ずのようにオオヨシキリが営巣しているが，オギに占有されている地帯にはほとんど生息していなかった。

種々の開発の進んだ今日，平野部で野鳥の集まるころとしては，河川敷に勝る

環境はなく，多くの種類が観察されるのが普通である。当地にあっては種々の鳥類が見られ，河川敷内にヤナギ・ハンノキなどの木立ちのあるところにはカワラヒワ・モズ・キジバト・オナガ・ヒヨドリ・カッコウ・コムクドリ等が多く，秋，冬に山地から漂行してくる種類にはミソサザイ・エナガ・コガラ・ヤマガラ・シジュウカラ・アカゲラ・ウグイス・メジロ・ホオジロ・イカル・カケスなどが見られる。人家の近くで普通に見られるスズメ・ツバメ・ハシボソガラス・ハシブトガラス・トビなども多く集まってくる。また，山の鳥で夏鳥が渡りの途中で河川敷に姿を見せる種類も多く，ヤブサメ・センダイムシクイ・キビタキ・オオルリ・コサメビタキなどがいる。冬鳥ではカシラダカが多く，他にシメ・ベニマシコ・マヒワ・アトリ・ツグミ・シロハラ・ジョウビタキなどである。

最上川流域全域でいえることであるが，調査区域で繁殖していて個体数が多い種類はオオヨシキリ・ヒバリ・カワラヒワ・ホオアカ・キジバト・キジ・セグロセキレイ・カルガモ・ゴイサキ・ハシボソガラスなどである。特にキジ・ホオアカ・カルガモなどが顕著である。

今回の調査区間で鳥類のよく集まる重要な地区は，米沢市窪田地区と長井市成田地区である。

窪田の千眼寺裏にはコハクチョウ・オオハクチョウ・コガモ・オナガガモなどの群が越冬している。この地点は流れがせき止められているため流水域が広く，中州があり湿地状の環境を作っているため，他の鳥類も多く集まるところであり，カワセミが生息しているのもこの地域である。(鳥獣保護区域である)。

長井市成田地区は，多くのカモ類の集結場所となっており，コサギなどの餌場ともなっている。他にはメジロ・シジュウカラ・ヤマガラなど漂行してくる小鳥類も多く集まるところである。

先に報告した最上川中流部（村山地区）の鳥類では，以前より確認された種類を含めると 130 数種にものぼったが，その中から現在殆ど見られない種類をのぞいた 104 種について報告した。

今回の報告数は 99 種であるが，これを県内で確認されている種類数と日本全体の種類数の比率から見ると次のようになる。

県内では，現在までに約 240 種が知られているが，中流部では 50%以上，今回では約 41%にあたる。240 種の中には迷鳥も含んでいるので，通常見られる数はこれにより少ない数になるはずである。しかし，県内全体の観察，調査が進むにつれて，確認数はまだまだ増加する可能性は大いにある。日本全体では 490 種となっているが，これと比較すると約 20%の種類数となる。

2. 鳥類の主な生息地

(1) 米沢市窪田付近

この地区は羽黒川，松川が合流し川原と中洲が良く発達し，ヨシ・ススキ原がある。ヤナギ・アカシヤなどの低木林内には，オオヨシキリ・コヨシキリ・カワラヒワ・バン・モズ・ヒヨドリ・キジバト・ササゴイなどが繁殖し，石原ではイカルチドリ・コチドリ・イソシギが繁殖している。川原に生えたヨモギなどの草地ではホオジロ・ホオアカ・ヒバリ・セツカ・カルガモなどの絶好の繁殖地になっている。

冬季になると置賜橋上流約200m付近，通称千眼寺裏はガンカモ類の渡来地となっており，コハクチョウ・オオハクチョウが毎年30～40羽ほど渡来して越冬している。種類はコハクチョウがおもで，オオハクチョウは極一部である。カモ類ではカルガモ・オナガガモ・コガモの数が多く，マガモや時折オシドリ・ハシビロガモ・シマアジなども観察される。また，山地より漂行してきたガラ類やキツツキの仲間，ノスリ・オオタカなどもよく姿を見せる。ヤマセミ・カワガラスなども観察でき，県内でも数回しか記録されていない冬鳥のクイナが時々観察されるのは注目したい。

渡りの時期には，コサギやカシラダカなどの小群が見られ，ノビタキ・タヒバリ・ハクセキレイ・タシギなども記録されている。

以上のように，この地区は貴重な野鳥の生息地であり，特にハクチョウなどの冬鳥の飛来地としては，県内でも数少ない一つであり，この地区の環境は現状のまま保全すべきであると考える。

この地区で今まで確認できた鳥類は78種類である。

(2) 下田橋～幸来橋付近

糠野目橋下流より白川橋付近までは特にとりたてて記すべき環境ではないが，鬼面川・和田川・吉野川・犬川等大きな河川が各方面からそぞき込む所であり，合流点では河川敷が比較的広く，旧河道跡などの沼地や湿地も見られる。この環境にはバン・カルガモ・カイツブリなどが繁殖している。又，シギチドリ類のハマシギ・クサシギなどの旅鳥が姿をみせ，カルガモ・コガモなどのカモ類が多く集まる場所が何箇所かみられる。

川西町洲島・大塚地区などがそのよい例である。

(3) 長井市成田付近

長井橋下流約1kmで野川が合流し，河口付近の河原ではイソシギ・イカルチドリ・コチドリなどが繁殖している。野川河口付近の両岸にはクルミ・ヤナギ・ニセアカシア・ヨシ・ススキなどが生育し，ここではカワラヒワ・モズ・ヒヨ

ドリ・オオヨシキリ・キジ・カルガモなどが繁殖している。

野川河口付近の草地内では，ホオアカ・ホオジロ・ヒバリ・コチドリなどが繁殖しており，夏～秋期にはコサギやササイゴイ・ゴイサキなどが群がりよい餌場になっている。

冬季にはカモ類が増えカルガモ・マガモ・コガモ・オナガガモ・ヒドリガモ，時おりキンクロハジロ・ヨシガモ・オカヨシガモなどがみられ，川原ではオオジュリン・ベニマシコ・ジョウビタキ・ツグミが記録されている。

長井橋付近では渡りの時期にハクセキレイ・アカモズ・ウグイス・ノビタキ・アオジ・オオルリ・キビタキなどが確認されており，チョウゲンボウも記録されている。

以上のように，この地区も野鳥の生息地としては貴重な地区であり，89種類の鳥類が確認されている。

3. 特記すべき鳥類

(1) ゴイサギ

サギの仲間では最も多い種類で，中形の大きさである。

色彩は，背は緑色光沢のある黒色，頸，翼，腰尾は灰色。額，顔，体下面は白色で繁殖期には後頭に2～3本の白色の長い飾羽が生える。嘴は黒く脚は暗黄色または肉色である。幼鳥は背面褐色でこれに黄褐色の縦斑があり，このため俗にホシゴイとも呼ばれている。

日本に広く分布しているが，北海道には少なく漂鳥で冬になると南に渡るが，県内には一部残って越冬するものがあり，留鳥にもなっている。

巣はコロニーを作り営み県内では羽黒山，尾花沢市，村山野川地区，白鷹町などで知られている。以前にくらべて全般的に減少している。

夜間にクワー，クワーと鳴きながら広範囲に活動し，水辺で魚類，カエル，貝類などを捕食している。

(2) ササゴイ

形，色彩はゴイサギに似ているが，はるかに小形で数は少なく，日本では中部地方以西に多い鳥である。山形県内では最近増えつつある。

沖縄，フィリピンなどで越冬する夏鳥である。

夜行性ではあるが昼間にも活動し，樹上に小枝を使って巣を作るなど，繁殖その他の習性はゴイサギに似ている。

(3) シマアジ

コガモとほぼ同大で，雄には白色眉はんがあり，幅の広い黒色の頭央線があり，顔と頸とは栗色で美しく，雌はコガモの雌に似ている。

わが国には冬鳥として秋〜春先に水辺で小数観察され，越冬の記録は少なく，むしろ旅鳥に分類される。

県内でも，村山野川地区，村山橋，原崎沼，湯沢沼などで小数記録されている稀な種類である。

(4) オカヨシガモ

中形のカモで雄の頭上部は赤褐色，翼には栗茶色があり，顔，喉は黄白色，背，胸は黒褐色であり，雌は上面黒褐色で地味な色彩である。

わが国では冬鳥として水辺へ渡来するがその数は少なく県内でも，原崎沼，湯沢沼などで数回記録されただけで，今回の調査で30羽程の群が確認されたのは貴重なデーターである。

(5) オオタカ

中形のタカで幼鳥と成鳥では著しく異なり，成鳥は上面灰黒色で後頸は白色がまじっている。白色眉はんがあり，下面は白く灰黒色の横はんが密に散在し老鳥ほど密である。幼鳥は上面褐色，下面には，褐色の縦はんがあり，横はんはない。

主として低山帯の森林で繁殖し，冬期間には平野部へ漂行する。古来よりタカ狩りに用いられるが，ハヤブサのように上空から急降下して獲物に襲いかかることはなく，横合いから獲物を捕える点が異なる。

(6) クイナ

クイナ類中最大で，頭上，背，頸側は茶褐色で黒色の縦はんがあり，喉は灰白色，顔は青灰色で過眼線があり，腹側には白黒の横じまがある。

わが国には冬鳥として，ヨシ・アシ原などの水辺へ渡来するがその数は少ない。

山形県では極く稀な種類で，その記録も少ない。置賜橋周辺で時折確認されているが，積雪が進むと南方へ渡去するようである。

(7) ヤマセミ

カワセミ類中最大で，白と黒とのまだらが美しく，キャラッ，キャラッと鳴きながら流れに沿って低く飛行し，常に同一場所に止まることが多い。頭上には黒色に白はんを混じえ，頭部の羽毛は長く延び羽冠状になっている。背面は一面淡黒色と白の鹿の子まだらである。

山地の大きな谷川に沿って生息しているのが普通で，常に清流に住み，一つがいでいて4km前後の領域を持ち，冬季には下流へ移動する。最上川でも山地の近くを流れる流域に生息している。

(8) カワセミ

ヒスイの別名があり，鮮かで美しい小形の種類で留鳥である。渓流，池，沼

などに住み，小魚を獲える。以前は全国各地に生息していたが，減少し貴重な存在になっている。しかし，最近になって回復のきざしが見られるようになってきた。

(9) チゴモズ

モズよりやや小さく，上面は前半灰色，後半が褐色で美しく雄の額と過眼線は黒で，頭上部は灰色，下面は白色である。

わが国には夏鳥として平野部か山麓の雑木林などへ渡来し，局地的に生息する種類である。その数は少なく，近年特に減少している種類の一つである。

(10) オ ナ ガ

頭部は黒色，背面は青色，下面は白色で尾の長い美しい鳥である。

関東地方，中部地方の一部では普通の鳥であるが本来，局所的な分布を示す種類である。東北地方では青森県，岩手県，宮城県の一部に限られていたが，新たに山形県内にも入り込んで現在分布を広げている種である。県内の初確認は昭和36年6月で，場所は村山市大淀の最上川辺りであったが，今では県内各地で見られるようになっている。

都市の郊外や村落，川岸の雑木林，果樹園などに生息していて，樹木のない田んぼの真中のようなところにはほとんど姿を見せないし，標高の高い山地にも住んでいないようである。

繁殖期以外は群で生活し，秋・冬の候には広い範囲で漂行する。今回の調査では，特に米沢市周辺で多く見られた。